



てんのうじ知りたいウォーク第17弾

「～大阪の戯曲を訪ねて四天王寺へ～」

日時 平成31年4月28日(日) 13時 催行
主催 てんのうじ知りたい倶楽部(旧未来わがまち会議)
協力 天王寺区役所

注意事項：神聖な場所の拝観となりますので

■境内では静粛に ■拝殿では拝礼を ■社殿・お堂内は脱帽 ■ペットはご遠慮ください。



てんのうじ知りたい倶楽部メンバー募集！

てんのうじ知りたい倶楽部は会員相互に協力し、天王寺区未来わがまち会議の活動を継承しつつ、天王寺区の宝(文化・歴史・企業など)を区民に知ってもらい、天王寺区に住む喜びを感じていただくとするグループです。詳しくは tennoji.shiritai.club@gmail.com にご連絡ください。

藤次寺 山号如意山 高野山真言宗 御本尊如意宝珠融通尊 創建弘仁年間(810-824)

発願藤原冬嗣、開基任瑞上人(冬嗣の甥)

生国魂神社南側に有った生玉十坊の地藏院を合併。藤原家の安泰を願い建立された。藤原家を治める寺であるところから、藤冶寺と称していたが、明治初年には、生玉十坊の一つである地藏院を合併し、藤次寺と改称し、現在に至っている。

藤原氏の祈願寺として、藤原氏一門より、深い帰依を受け栄えていたが、寺運の盛衰があった。慶長年間(1596年～1615年)に、加藤清正が大檀主となり、金堂、伽藍、堂宇などを建立した。広大な寺域(境内)を持ち、壮観であったと言う。



中興憲遵阿闍梨の時には、如意宝珠融通尊への信仰が盛んになり、「大阪の融通さん」と称されて、多くの人々の信仰を集めている。明和元年(1764年)、中興清範和上の時、九条尚実が家運長久を祈るため永代不易の祈願寺として改めて、旨辞を授けた。江戸時代末まで、九条家(五摂家の一つ。藤原兼実が祖。)の祈願寺であった。

しかし、昭和20年(1945年)3月、戦災により藤次寺は全焼した。都市計画のために境内地の移転があった。昭和35年(1960年)に金堂、庫裡、寺務所が完成した。

藤次の名は藤原北家の祖藤原冬嗣公が藤原家を治める意と、冬嗣を音読みして藤次寺とした、加藤清正も当寺に帰依し、屋敷が西隣りにあったといわれる。摂津国八十八ヶ所霊場十九番。

○大阪府指定文化財「弘法大師像」

像高50センチ余り、ヒノキの寄木造り、玉眼

この像の首の内側部分に1437年に大仏師法眼康秀よってつくられたと書かれている。

康秀を名乗る仏師は2人おり、ひとりには15世紀に「下野法眼」を名乗った康秀、もうひとりには16世紀に活躍し「左京」を名乗って活躍した康秀であるが、本像の作者は「下野」の方の康秀である。康祐の子で、運慶流を受け継ぐ七条仏所のリーダーであり、その他の作品としては、京都東山の長樂寺に残る時宗の祖師像がある。

○大阪の融通さん

御本尊如意宝珠融通尊(宝生如来)は衆正に福德をお授けくださる総益の仏様で一般には「融通さん」という俗称の方が有名

○お墓

山崎豊子さん 小説家 大阪生。大正3年1月2日生平成25年9月29日没享年89歳

京都女子専門学校(現・京都女子大学)卒。昭和20年に毎日新聞社入社、学芸部に所属。当時学芸副部長だった井上靖のもとで記者勤めをする傍ら小説を書き始め、昭和32年生家であった大阪・船場の老舗昆布店(小倉屋山本)を題材にした『暖簾』で作家の道にすすむ。翌年『花のれん』で直木賞受賞。以降は実際の社会問題や事件の裏側に迫った問題作を次々と発表。ほかに『白い巨塔』『華麗なる一族』『大地の子本名=杉本豊子(すぎもと・とよこ)』

持明院

山号蜜印山 真言宗御室派 御本尊聖観世音 創建元和年間宝暦5年再建 戦災3月14日

山門から本堂の右側は壮大な墓所である。僧契沖も一時期住持。

次の曼荼羅院の後身と伝えるが、二十一ヶ寺には十一・十二番として並び、近世史料・古地図でも曼荼羅院とは別寺院。持明院が曼荼羅院を吸収合併して存続したと解釈するのが妥当。曼荼羅院が生玉社僧であるが故に神仏分離で立ち退きを余儀なくされたのに対し、持明院は独立寺院（攝陽群談のみは「生玉社僧」とする）であったために、存続が容易だったのだろう。攝陽奇観所収の大坂地藏巡りの三十二番持明院。また、境内の金毘羅祠を、法善寺の「下の金比羅」、高津の



「中の金比羅」に対して、「上の金比羅」と称し、近世後期には、十月十日に三所金比羅に詣でることが流行した。明暦三年(1657)版「新板大坂之圖」では生玉表参道の南側だが、宝暦九年版「攝州大坂画圖」では北側になっている。生玉十坊の別格

境内には「橋姫大明神」「卯の日大明神」「二十日大明神」の三神と向かい側に「子育て地藏尊」が祀られている。「橋姫大明神」は宇治の橋姫神社からの勧請、悪縁を切ると言う。「卯の日大明神」は、兎を祀っており、子沢山の所から縁結びの神とされる。「二十日大明神」は狐、すなわち稲荷、商売繁昌開運発展。「子育て地藏尊」は子授子育て健康息災 古くから無量寺のお灸、藤次寺の融通さん、持明院の縁切縁結びとして有名です

<攝陽群談卷第十二(1701)>持明院

- ・同所(東生郡生玉中寺町東側)にあり。生玉社僧真言宗古義高野山寶性院末寺なり。
- ・攝陽奇観卷之二十四ノ上
- ・寶永五(1708)戊子
- ・大坂地藏巡り初ム

佛土山十萬寺第六代主説空なる僧大坂におゐて四十八ヶ所の地藏巡禮を初め猶諸人に信心なさしめん爲に十輪經および占察經本願經延命經の要文を直談して地藏菩薩の大慈大悲深重なる事を示せり曾又順禮所を四十八ヶに定る事や此菩薩身を四十八種に分て衆生を利益し給ふに表ス猶委しき縁記あれ共爰に略し四十八ヶ所の巡禮の寺々は左に記ス

- ・いくだまば、さき
- ・卅二ばん 持明院.じめういん
- ・五寸弘法.こうぼう乃さく

<摂津名所図会卷之四(1798)>

北向八幡宮. きたむきはちまんぐう

活玉.いくたま門前南の方蓮池の側にあり。生玉の社司松下氏守護す。勧請.かんじょうの初めは慶長年中城中の諸士この地において射御の稽古場によつて八幡宮を勧請しけるなり。今五月五日の流鏝馬.やぶさめはこの遺風なり。地名も今において馬場前.ばばさきといふ。北向は御城守護の謂.いひなり

金毘羅権現. こんびらごんげん

生玉鳥門の西にあり。持明院と号す。古義真言宗。本尊には聖観音、長.みたけ三尺五寸。飛驒内匠.ひだのたくみの作を安置す。金比羅権現京師御室.おむろ仁和寺宮.にんわじのみやより御寄附にして当寺の鎮守とす。毎月十日には遠近より歩.あゆみを運びて群をなせり。

<摂津名所圖會大成卷之四(1855-)>

金毘羅社. こんひらのやしろ

生玉の馬場前.ばゝさき持明院.ぢみやういんの寺内にあり當神像.とうしんざうハ京洛.みやこ 御
室仁和寺宮.おむろにんなじのみやより御寄附.ごきふにして當寺の鎮守とす 例月九日十日にハ遠
近より詣人ありていと賑わし 現持明院は、生玉社のすぐ東にあり、縁切り・縁結びの寺として信仰を
集めている。現行撰津八十八所第二十二番。

契沖阿闍梨

契沖阿闍梨は、幼くして摂津国東成郡大今里村（現在の大阪市東成区大今里）の妙法寺の丰定（かいじょう）に学んだ後、高野山で東宝院快賢に師事し、五部灌頂を受け阿闍梨の位を得る[2]。ついで摂津国西成郡西高津村（現在の大阪市天王寺区生玉町）の曼陀羅院の住持（一寺の長である僧。住職）となり、その間に下河辺長流と交流し学問的な示唆を受けるが、俗務を嫌い畿内を遍歴して、大和の長谷寺にいたり17日間も絶食念誦し、室生寺では37日間、命を捨てようとしたほどの激しい煉行をした。高野山に戻り、円通寺の快円に菩薩戒を受け、その後、和泉国和泉郡久井村（現在の和泉市久井町）の辻森吉行や同郡万町村（現在の和泉市万町）の伏屋重賢のもとで、仏典、漢籍や日本の古典を数多く読み、悉曇研究も行った。延宝5年（1677年）に延命寺・覚彦に安流灌頂を受ける。延宝6年（1678年）、妙法寺住持分となった後、晩年は摂津国東成郡東高津村（現在の大阪市天王寺区空清町）の円珠庵で過ごした。『万葉集』の正しい解釈を求める内に、当時主流となっていた定家仮名遣の矛盾に気づき、歴史的に正しい仮名遣いの例を『万葉集』、『日本書紀』、『古事記』、『源氏物語』などの古典から拾い、分類した『和字正濫抄』を著した。これに準拠した表記法は「契沖仮名遣」と呼ばれ、後世の歴史的仮名遣の成立に大きな影響を与えた。1701年 死去。

徳川光圀から委嘱を受けた『万葉代匠記』（『万葉集』注釈書。1690年）をはじめ、『厚顔抄』、『古今余材抄』、『勢語臆断』、『源註拾遺』、『百人一首改観抄』、『和字正濫抄』など数多く、その学績は実証的学問法を確立して国学の発展に寄与し古典研究史上、時代を画するものであった。

唐木白檀移植の古碑

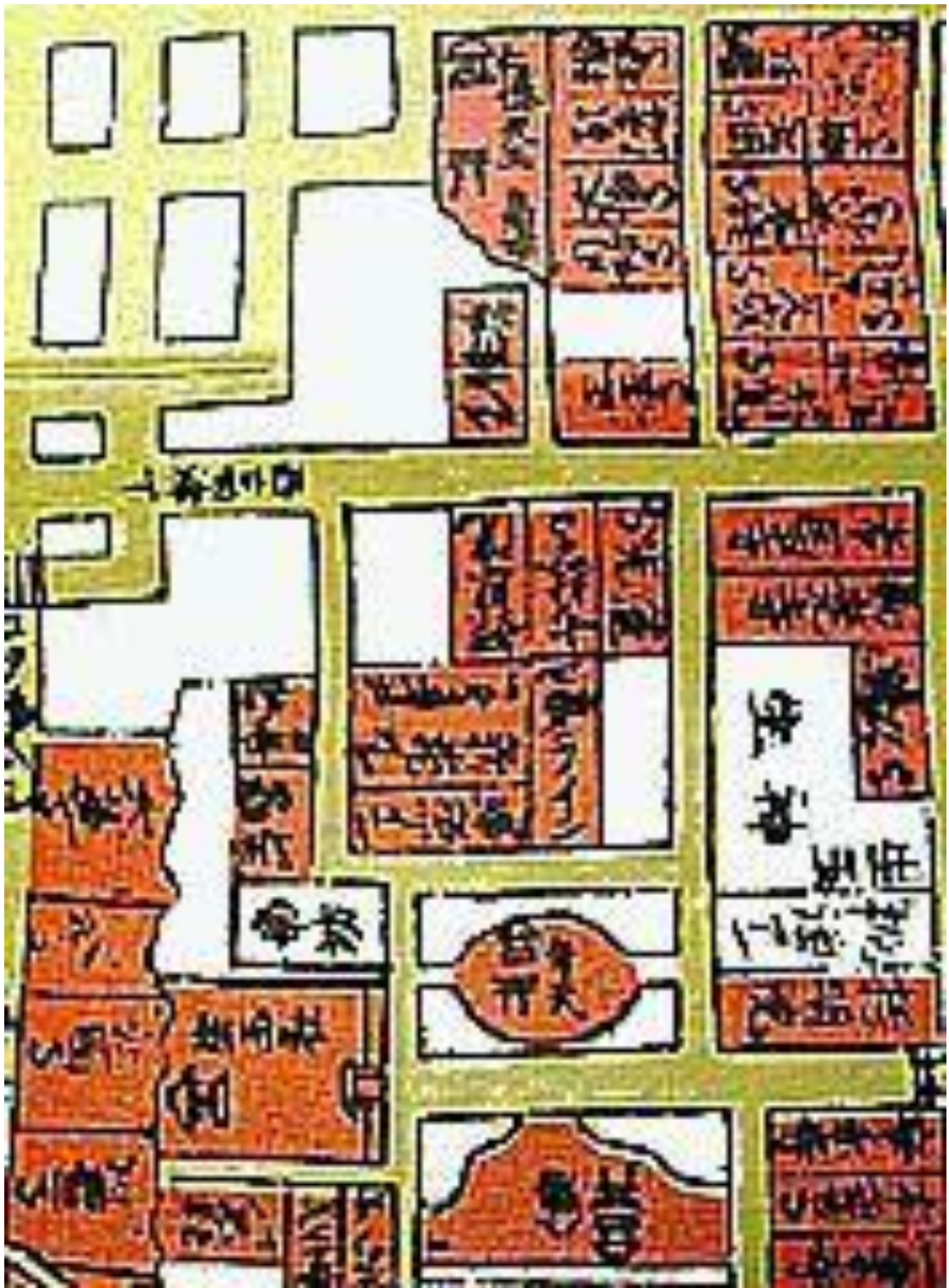
加藤清正1592年文禄の役で朝鮮外征、22800名を率いて釜山に上陸不敗の将、鬼上官と呼ばれた。大山の麓に布陣した折に「虎退治」がある。1593年6月第2次晋州城の戦い
1597年慶長の役では再征軍の第1軍、蔚山城（うるさんじょう）の籠城12日間明軍5万7千に苦戦、8月秀吉逝去により終結し熊本に帰還した
攝州大坂画圖宝暦九年版

瀧瓢水

貞亨元年（1684）～宝暦12年（1762） 加古川市別府生まれの江戸中期・俳人。叶屋新之丞有恒（かのうや しんのじょう ありつね）。富春斎、野橋斎、一鷹舎とも号し、74歳の時、剃髪して自得（じとく）と名乗りました。松木淡々や中川乙由に俳画を学び軸物も残っている。瓢水は、別府港を拠点とし、大阪や西国と手広く商いをしていた豪商・船問屋「叶屋」の家に生まれ28歳のとき家督を継いだ。句作にふけり家業をおろそかにして裕福な家産を失っていったという。蔵を売ったとき「蔵売って 日当たりよき牡丹かな」という句を詠んでいる。俳諧の名手との評判がたち京都御所に招待されるなど、京都・大阪を中心に活動して宝暦12年（1762）78歳のとき大阪の旅先で亡くなった。墓碑は、大阪天王寺区の持明院に残っている。建立者は大阪の門人・筒井青瓦と墓標に刻まれています。



攝州大坂画圖宝曆九年版



本誓寺

山号被佛山 院号往生院

浄土宗 御本尊阿弥陀如来 創建文禄2年3月(1593)開基存譽助給上人手塚山の姫松から移転
戦災3月14日 昭和39年11月(1964)本堂、庫裏が再建

大坂三十三ヶ所観音めぐり第十八番札所 戦災で観世音菩薩焼失 昭和49年石の観音さま建立願いを叶えてくださる観音さまを、多くの方々にお参りしていただけるようにと堂内から境内地に安置し、門は四六時中開けられている

近松門左衛門「曽根崎心中」より、半ば以上経巡ったが、さらにこれから幾つ行けば良いのかと思案しながら生玉にやってくる。本誓寺は十八番、ぬかずいて私の境遇で今後幾つ生きられましようか、どうか御守護をと懸命に祈念する。



天王寺区内の観音さま

十一番興徳寺 十二番慶伝寺 十三番遍明院 十四番長安寺 十五番誓安寺 十八番本誓寺
十九番菩提寺 二十番六時堂 二十一番経堂 二十二番金堂 二十三番講堂 二十四番万燈院
二十五番清水寺 二十六番心光寺 二十七番大覚寺 二十八番金台寺 二十九番大蓮寺

太平寺

山号護国山 曹洞宗 御本尊釈迦如来 創建寛文3年4月 戦災3月14日

その昔弘治元年(1555)ごろは真言宗龍翔寺、寛文年間加賀の国大乘寺の僧が荒れた伽藍を復興し曹洞宗として、護国山太平寺に改称した。

銅鏡総高3尺、口径2尺1寸、天啓甲子年秀秋吉日造の銘がある。美術上歴史上保存の要ありとして供出を免れた。



北山寿庵の墓・北山不動明王

生前自ら建てたもので世人に北山不動明王と呼んでいるが、寿庵は清国福州（福建省の省都）の人、母は長崎の人、医学を学んで大坂で開業し当時随一の名医と言われた

大阪市指定文化財・大阪市指定無形文化財「北山不動明王・金加迦羅・世伊多加童子とその信仰習俗」に指定される。

『撰津名所図会大成』木村兼葭堂著に「虚空蔵堂太平寺にあり虚空蔵菩薩を安ず参詣間断なし別けて三月十三日は十三歳の童子群参して智福を祈るこれを十三参といふ」と記され、太平寺が「十三まいりのお寺」として多くの人々に親しまれ、信仰を集めていた様子がわかります。

また境内には北山不動明王・祇空翁文塚などが祀られ、おおさか十三仏霊場第十三番・大阪四不動南方霊場として、四季の花々の間に歴史のひとこまを伝えています。

虚空蔵菩薩こくうぞうぼさつ

大空のような広大無辺の知恵と慈悲を持ち、衆生の願いをかなえるとされ、十三仏信仰の十三番目、満願成就の仏さまです（おおさか十三仏霊場第十三番）。また丑年寅年の守り本尊さまとして信仰を集めています。「十三まいり」は「知恵詣り」「知恵貰い」等と称して13歳の子供が虚空蔵菩薩さまの仏徳にあやかるため参詣する古くからの行事です。

女子はこの時に初めて大人の着物を作ってもらい、十三まいりをする習慣が現在まで続いています、男子は元服のお祝いをする歳で、また当日、初めて自分が生涯使う「数珠」を買ってもらい、境内で13種類のお菓子「十三智菓」を求め、お供えして持ち帰り家中でそれを食べて、13歳の成人を祝い大人の世界に仲間入りしました。

祇空翁文塚

祇空は大坂の菓種商の家に生まれ、元禄から享保にかけて活躍した浪速を代表する俳人でした。宗祇を慕い、芭蕉に傾倒した彼の俳風は「法師風」と称され、へつらいがなく、しかも平明であると評されています。その生涯のほとんどを旅で過ごし、享保8年(1733年)箱根の石霜庵で没しています。没後、門人の手で句集『くち葉』が刊行され、この行雲流水の俳人の句境をよく伝えています。しかし、なぜ太平寺にこの文塚があるのかは定かではありませんが、寛政10年(1798年)前後に刊行された『摂津名所図会』の第二巻に紹介されています。